

# 国語

## 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

### 1 前文

令和8年度「共通テスト」本試験の『国語』は438,156名が受験し、平均点は116.37点であった。

今回、共通テストの問題作成方針を踏まえ、高等学校「国語」教科担当としての立場から本年度の試験問題を検討した。なお、評価に当たっては、15ページに記載の8項目の観点により、総合的に検討を行った。

### 2 内容・範囲

第1問 筆者の私的経験から見出された言語化できない「美しいもの」や「わかりえないもの」についての感覚が、個人の枠を超えて、芸術的体験全般に通ずるものとして一般化されながら論じられた、随想的な側面をもつ論理的な文章である。バタイユの指摘を踏まえて重層的に展開されていく論旨を的確に読み取る力や思考力を問う上で、適切な素材文及び問題であった。

問1 漢字・熟語についての基本的な知識・技能を問うている。正答率が90%を超えるものが3題あることは課題である。また、語彙の側面から判断する問いの出題にも期待したい。

問2 造形活動を行っている筆者の原体験とも言える幼少期の感覚について、傍線部より前の部分からその内容を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問3 バタイユの考えを用いながら論じた「造形行為」の特質について、傍線部前後からその内容を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問4 傍線部を含む形式段落の内容が理解できているかを問うている。問いの意図が受験者に伝わりづらい設問リード文であるため、より明確に伝える表現の工夫が必要であった。

問5 「価値尺度」や「概念的枠組」の共有により日常的に「交換」を行っている「他者」にも、実は「わかりえない」部分があるということが自ずと理解される理由について、傍線部前後からの的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問6 本文全体を通して語られる、筆者にとっての「作品の制作」についての理解を問うている。正答選択肢においては「贈与」についての言及がやや薄かったと思われる。

第2問 少年時代の「勝呂」が見ていた「母」の姿が、成人して家族を得た現在の「勝呂」の生き方に揺さぶりをかける状況を、回想と現実を行き来する構成を用いて巧みに描いた文章である。本文の時代背景への理解に加え、文学的な文章の構造と内容を把握する力や、登場人物の心情を精査・解釈する力を確認する上で、適切な素材文及び問題であった。探究的な学びの過程につながる問6は、学習指導要領に沿った良問である。なお、語彙に関する出題は見送られているが、「言語文化」の指導目標に鑑み、今後の出題に期待したい。

問1 「勝呂」が感じた「寂しさ」と「怒り」の原因について、傍線部前後の文脈からの的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問2 「父」が満足そうに見えた理由について、傍線部前後の「父」や「母」の言動を根拠的に的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問3 文中で複数回描かれる「母」の哀しげな表情の裏にある心情について、それぞれの場面の状況を踏まえて的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問4 素材文の特性でもある回想と現実の往還を通して浮き彫りとなる、「勝呂」の過去と現在の心情を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問5 本文における表現の特色とその効果を的確に捉える力を問う適切な問題であった。

問6 本文中の「母の死顔」に関する叙述への着目を切り口に、授業における探究的な学びの過程を想定した具体的な場面が設定されている。

(i) 【ノート】に抜粋された本文以外の「母」に関する描写を踏まえて、「母」の人生や生き方について解釈したり考察したりする力を問う適切な問題であった。

(ii) 「残酷な悪戯」という表現について、(i)を踏まえつつ、本文における「勝呂」の状況や心情等をもとに解釈する力を問うている。「読むこと」の学習過程に沿った良問であった。

第3問 国語科における「書くこと」の言語活動が想定されている。様々な形式からなる資料を読み、文章の構成や展開の工夫、表現の仕方を検討する力を測る意図が見られ、学習指導要領の「書くこと」の学習過程に即した素材文及び問題となっていた。しかし、大問全体として文章量が多く、各設問においても多様な検討が要求されたことから、思考の負荷が大きかった。今後は、受験者の学習の成果が十分に発揮されるような素材の配置や設問の工夫、配点や時間の検討により、当該大問が更に発展していくことを期待したい。

問1 【資料Ⅰ】から「伝えたいメッセージ」を読み取り、【資料Ⅱ】を参照しながらMさんの修正意図に沿った表現を選択する力を問うている。複数の資料を示すことに関連性や必然性が更に深まる問いとなる工夫が必要であったと思われる。

問2 【文章】の第3段落の趣旨を踏まえ、目的に応じて文章を整える力を問うている。擬音語は内容そのものを説明するために使用するものではないことに気づかせるという出題意図が、やや分かりにくかった。

問3 (i) 【文章】の第4段落を書くために【資料Ⅱ】と【資料Ⅲ】のそれぞれの情報を読み取り、吟味する力を問うている。その出題意図は歓迎されるものの、選択肢の数が多く、解答に時間を要する問いであった。

(ii) 【資料Ⅱ】に見られる工夫について【資料Ⅲ】との比較結果をもとに考察し、【文章】の第4段落に書くべき内容を検討する力を問うている。複数の資料を読み取り、書くために思考するという学習過程に沿った適切な問いであった。

第4問 平安時代中期に成立した日本最古の長編物語である『うつほ物語』からの出題である。仲忠の妻が娘を出産した直後の場面が描かれており、人物関係図や注を参考にして古文を的確に読み取る力、また、複数のテキストを踏まえて内容を把握する力を確認する上で適切な素材文であった。各設問も素材文に沿って適切に設けられていたが、文語のきまりの知識を用いて古文を読む力を測る設問が見られた一方、主に文語文法や単語の断片的な知識で解くことができる設問も見られた。なお、文語のきまり等については、「言語文化」の学習範囲に見合った出題の検討が引き続き必要と思われる。

問1 本文の読解に必要な文語のきまりや語句の知識を問うている。文脈理解によらず解答できる面もあった。

問2 文語文法や敬語の知識を活用して内容を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問3 琴をめぐるやり取りに関して、第1段落の内容を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問4 琴の演奏に関して、第2段落と第3段落の内容を的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問5 提示された引用文と本文の内容を、それぞれの関連性に留意しながら的確に読み取る力

を問う適切な問題であった。

第5問 江戸時代の漢学者である長野豊山の日本漢文『松陰快談』からの出題である。詩を学ぶことについての筆者の見解を、漢文に用いられる基本的な知識や句法をもとにした的確に読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。各設問も素材文に沿って適切に設けられており、読むために必要な訓読のきまりを踏まえて漢文を読み取る力を測る設問が見られた。今後は、知識を活用してより深い思考力を問う問題の出題が期待される。

問1 本文の文脈に即して語句の意味を問う適切な問題であった。

問2 詩作の際に手本とするものに関する筆者の考えについて、訓読のきまりをもとに的確に傍線部の内容を読み取る力を問う適切な問題であった。

問3 本文を的確に理解するために必要な訓読のきまりや書き下し文の基本的な知識・技能を、文脈を踏まえて活用する力を問うている。正答率は低いものの、語句や句法の知識だけではなく、前後の文脈から判断させる意図を含んだ適切な問題であった。

問4 漢文の基本的な句形を踏まえて傍線部分を解釈する力を問うている。語句や句法の知識だけではなく、前後の文脈からの判断を要するような設問の工夫が期待される。

問5 前後の文脈から傍線部分を的確に解釈する力を問う適切な問題であった。

問6 筆者の言葉の内容について、文脈を踏まえて的確に読み取る力を問う適切な問題であった。

問7 詩の評価に関する筆者の考えについて、本文と【資料】とを組み合わせる読み取る力を問う適切な問題であった。

### 3 分量・程度

全体として設問数は適切だが、90分の試験時間に対する分量がやや多いため、昨年度よりも難易度が高まった。速読や素早い情報処理を求める問題構成に偏らないよう配慮が必要である。

第1問 分量、設問数は適切。本文、選択肢ともに抽象度がやや高いものの、おおむね適切な難易度であった。ただし、問1の漢字が全体的に易しかったことは課題。

第2問 設問数、難易度はともに適切。一方、問6については、言語活動を含む問いとしては適切な文字数だが、『国語』全体の分量を考慮するとやや多かったように思われる。

第3問 設問数は適切だが、選択肢の数も含め分量が多く、設問も全体的に解きにくかった印象。20点という配点に見合った問題となるような工夫・検討が必要と思われる。

第4問 分量、設問数はおおむね適切。ただし、注の分量がやや多かった。文語のきまりや語句の知識を問う問題の難易度については「言語文化」の範囲を超えないよう、引き続き検討が必要。

第5問 設問数、分量は適切。本文が読みやすく、知識で解答できるやさしめの設問がやや多い点は課題であるが、『国語』全体のバランスを考慮すると難易度もおおむね適切であった。

### 4 表現・形式

第1問 文章表現、設問形式、配点についてはおおむね適切であった。

〔問6〕『作品』を制作するという事に対する筆者の考えについて、本文の叙述をもとに的確に捉え、要旨や要点を把握できているかを問う出題であり、題材の意義や特質を生かした出題とするという問題作成方針に合致している。

「わかりえない美しさ」という本文の主題ともいえる言葉について、幼少期の体験の記憶から始まる本文全体の構成や論理の展開を踏まえて包括的に理解しているかを問える

点では適切な出題であったが、正答選択肢において「贈与」への言及がやや薄かった点、また、学習の過程を重視した場面設定等が昨年に引き続き見られなかった点は課題である。

第2問 文章表現、設問形式、配点については適切であった。

〔問6〕授業で気になった表現について、疑問点をもとに考察を進める過程で解釈の不足部分に気づき、他者との対話からその不足を補うことで解釈を深めていくという言語活動を重視した学習場面が設定されており、問題作成方針に合致している。

【ノート】の記述を根拠に、(i)は母の生き方を解釈・考察する場面、(ii)は他者の発言を踏まえ、独特な表現に着目することで、本文の解釈を深めていく場面をそれぞれ想定した設問であった。本文の内容把握に加え、【ノート】の記述から目的に応じて必要な情報を取り出したり、本文と【ノート】の内容を総合させて解釈したりすることが求められる出題であった。

第3問 文章表現や用語、図表は適切であった。一方、問題形式が複雑で情報量が多いことから、各設問の意図を把握するまでに時間を要した受験者がいたと考えられる。引き続き適切な問題形式のあり方や配点について検討いただきたい。

〔問3〕好きな本に見られる工夫について自分の考えを書くために行う様々な学習の過程を重視した場面設定となっており、問題作成方針に合致している。また、読書の指導にもつながる出題の工夫が見られた。

(i)は、二つの資料を比較するにあたり、それぞれの資料の特徴を表にまとめて整理する場面、(ii)は、【資料Ⅱ】に見られる工夫を考察するために、【資料Ⅲ】との比較結果の分析をもとに、今後の方針を考える場面をそれぞれ想定した問題であった。各問いの設問リード文に学習活動の目的や内容が示されているため活動場面は把握しやすかったが、形式の面では、複数ページにわたる複数の資料の細部を検討しなければならず、解答に苦慮した受験者がいたと思われる。

第4問 文章表現や用語、設問形式、配点については適切であった。

〔問5〕引用文として本文より後の場面における短い会話文を用い、本文の内容を引用文と結びつけさせることでより多面的・多角的な視点から解釈させる形式の問題であり、問題作成方針に合致している。生徒の興味関心を喚起し、主体的な学びへとつなぐ高等学校の授業の場面が想起できる出題であった。

第5問 文章表現や用語、設問形式、配点については適切であった。

〔問7〕本文及び本文と同一著作の別箇所からの引用である【資料】の両方から、詩の評価に関する筆者の考えを読み取らせる問題であり、複数の題材の設定は問題作成方針に合致している。しかし、各選択肢が本文と【資料】の内容の組み合わせとなっており、内容の解釈を問う最後の問題としては物足りない面があった。今後は、言語活動の設定も含め、多面的・多角的な読みを十分に反映した形式の工夫に期待したい。

## 5 まとめ（総括的な評価）

「新教育課程」を踏まえて2年目となる本年度も、複数の資料を比較しながらその内容を的確に理解する力や、より良い文章にするために内容を捉え直したり、方針を検討したりする力等を問う大問を含む、五つの大問で構成された試験であった。出題については、知識の理解の質を問う問題や、言語を手掛かりとしながら、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題が、生徒の学習の過程が意識された場面設定の中でおおむねバランス良く出題されている。実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力の育成を目標とする「現代の国語」と、我が国の言

語文化への理解を深めることを目標とする「言語文化」の二つの共通必修科目を通して身に付けた力を評価するのに適当なものであった。本テストが、今後より一層、高等学校での学習を通して受験者が身に付けた力を評価するのに適当なものとして作成され、また、高等学校国語科の授業づくりに資することを期待して、意見・要望を以下に示す。

- (1) 学習指導要領に沿った問題作成がなされており、生徒による「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた設問が出題されている。第2問における文学的な文章の表現における疑問点を挙げ、本文以外の部分も読んで考察しながら人物像について解釈を深める設問や、第3問における与えられた課題に対して、集めた情報を吟味し、構成や展開を工夫して文章を書く設問は、いずれも「主体的・対話的で深い学び」の過程を意識した設定であり、平素の学習活動を通して身に付けた力を評価することができるよう工夫されており評価される。
- (2) いずれの大問においても本文が比較的平易であり、加えて昨年に引き続き大部分が4択での出題であったため、テキストの内容を検討したり全体の要旨を把握したりして読み取ったことをもとに、各設問の選択肢を吟味することが概ね可能であったと思われる。他方、第3問は様々な資料を比較して分析し、文章の内容を捉え直したり、今後の方針を検討したりする場面が設定されており、様々な力が複合的に求められる設問であった。複雑な思考が必要な上、どのようなことを求められているのかが捉えにくく、多少困惑した受験者がいたことが想定される。本文や資料の深い理解に加え、選択肢の吟味が求められるこれらの設問に対して、受験者が十分に思考し、判断する時間が確保されるよう配慮を求めたい。
- (3) 本テストは、「言葉による見方・考え方」を働かせ、「言語活動」を通して、生徒の総合的な言語能力を育成するという学習指導要領の趣旨を再認識させるものであった。第2問における疑問点を解決するために他の場面を読み、人物像を考察するという言語活動の設定、第3問における「その本にどのような工夫が見られるか」というテーマに対して、自ら資料を集めて比較・分析し、自分の考えを文章にまとめる学習課題の設定など、授業改善あるいは生徒の探究的な学びにおいて大いに示唆に富むものであった。また、常用漢字、語句の意味などの〔知識及び技能〕は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」を通して学ぶものとして、従前、高等学校の授業において大切にしてきたものであり、一定数の出題がなされたことは歓迎される。一方、第1問、第2問においては、漢字の読み書きだけではなく、漢字の意味や語句の意味についてテキストを踏まえて考える設問など、一定の語彙力を求める出題についても、知識の理解の質を求める観点から検討いただきたい。
- (4) 全体を通して、高等学校での学習履歴を踏まえた上で、高校生が読むのにふさわしい多様な題材が用いられている。今後も登場人物の心情や人物像に迫ることで解釈を深めることができる文学的な文章、様々なテーマに関して高校生が視野を広げ、考えを深めることのできる論理的な文章、現代の社会生活において高校生が考察するのにふさわしいテーマについて、多様な文体や様々な図表等を伴って書かれた実用的な文章、文種や形態の異なる古典が素材として幅広く検討され、用いられることを期待する。出題に当たっては、素材の魅力や価値を十分に生かし、受験者がテキストから得た情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、文章を書いたりする力を発揮することのできる設問が、高等学校における学習の過程を意識した設定のもと、全ての大問においてバランス良く出題されるよう工夫していただきたい。共通テストにおける出題が高等学校国語科における授業改善を促し、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を生徒に育成することに資するものとなるよう期待する。